

ニッケル市場はこうなる

LMEを補完、 いずれはアジアの中核に

日本経済新聞社大阪本社編集局経済部 北島 穰

大阪商品取引所（村田文男理事長）がニッケル地金を先物市場に新規上場します。1997年10月に上場したアルミニウム地金に続く非鉄金属先物の第2弾です。同取引所はアルミと並ぶ大型非鉄金属の銅地金の上場も視野に入れており、ニッケルの成否は今後の日本の非鉄先物市場を占う意味で重要なつなぎ役になるでしょう。

関西挙げて取り組む

ニッケル上場は関西挙げての取り組みでした。近畿通産局（当時）が1999年9月に「近畿メタルマーケット研究会」を立ち上げて、

新たに上場する商品として銅、亜鉛、ニッケル、鉛が有望との結論を出しました。これを受けて、2000年4月に大阪商品取引所が「メタル市場創設懇談会」を設置、当面の上場候補として銅、ニッケル2品目に絞り込みました。このうち、ニッケルについて直ちに上場を準備すべしとの懇談会の提言に従い、同志社大学・大学院教授の杉江雅彦氏を委員長とする「ニッケル市場専門委員会」が7月に発足しました。

LMEの取引要綱に沿う

ニッケル市場専門委がまとめた取引要綱に

大阪商品取引所のニッケル地金の取引要綱

標準品	ニッケル純度99.80%以上の一次地金
取引限月	1年以内の奇数月の6限月
呼値単位	1キログラム当たり1円
取引単位	1トン
受渡単位	3トン
受渡場所	東京都、神奈川県、愛知県、大阪府、兵庫県、福岡県
受渡供用品	25銘柄(12カ国)、ロンドン金属取引所ブランド対象
受渡方法	倉荷証券
供用期限	期限を設けない

ニッケルの市場規模（単位：1,000トン）

	LME取引高	世界消費量
1991年	4,293	661
92年	8,655	624
93年	12,713	676
94年	20,430	788
95年	19,918	894
96年	18,955	857
97年	28,131	944
98年	28,776	936
99年	33,883	1,004
2000年	33,254	1,043

（注）取引高はロンドン金属取引所（LME）、世界消費量は国際ニッケル研究会（INSG）調べ

よると、標準品、形状規格、受け渡し供用品など、基本的にはロンドン金属取引所(LME)の取引要綱に沿ったものです。ニッケルがLMEに上場されたのは1979年4月。当初は世界最大のニッケル地金精錬メーカーであるカナダ・インコ社などメジャー(国際資本)が先物取引に反対していましたが、1980年代半ばからは、リスクヘッジなどで積極的にLMEを使うようになりました。市場規模はベースメタルと呼ばれる銅やアルミに

は及びませんが、コモディティー(市況商品)としての条件を十分備えています。

市場設計で違うのは取引単位(1トン)と受け渡し単位(3トン)。いずれも6トンのLMEに比べると6分の1、2分の1の規模です。これは、大阪があくまで「国際市場のLMEを補完する市場」という位置付けによるものですが、大阪商品取引所は長期的にはアジアの中核市場を目指す考えです。

村田文男理事長に聞く

(聞き手は日本経済新聞社記者 北島穰)

大阪商品取引所がニッケル地金を今年中に新規上場(試験上場)する予定です。既に上場



大阪商品取引所・村田文男理事長

しているアルミ地金を上回る当該業者の参加が見込まれます。新市場の展望について、同取引所の村田文男理事長に聞きました。

「アルミ以上に当業者が参加」

——ニッケルを扱う業者の参加を促すため、どのような工夫を凝らしていますか。

村田 世界最大の非鉄金属市場であるLMEをベースに市場設計をしました。LMEはメジャーも取引に参加しており、非鉄関連ビジネスに従事する関係者はLMEに何らかの形でかわらないと生きていけません。だから、受け渡し供用品もLMEと同じ25銘柄(ブランド)を指定しています。

日本へはこの25銘柄すべてが輸入されており、商社など当該業界のヘッジニーズなど

には十分対応できます。これに日本の特殊性を加味しました。例えば、取引単位は1トン、受け渡し単位は3トンと、いずれも6トンのLMEに比べ小さく設計しています。これは市場の流動性を高めるねらいもありますが、トラック輸送など日本の流通実態に合わせた面もあります。

——当業者の参加をどう読みますか。

村田 アルミの場合、今年に入ってから当業者の参加が目立っています。受け渡し高は今年1月に1,350トンと初めて1,000トン台に乗った後、5月には7,225トンに急増しました。建玉(取組高)に占める当業者の比率は今年5月に9.4%に達しました。今春に当業者の手数料が自由化されたことなどの影響でしょうが、日本の商品先物市場の平均(2~3%と推定)を大きく上回っています。よく指摘される「投機の間」からアルミは脱却しつつあります。ニッケルの当業者比率はアルミをも上回ると見えています。

ニッケルはアルミより値動きが激しいし、価格も高いため、当業者のヘッジニーズが高まるからです。専門商社や問屋の中には「先物市場を使いたい」との声が増えており、実需に密着した充実した市場が形成されると期待しています。